

【翻刻・解題】 山陰歴史館蔵『無題歌合集』(三)

概要

渡邊 健 米子高専古文書の会

ここでは、前稿に引き続き山陰歴史館蔵『無題歌合集』の翻刻本文を掲載する。資料番号17「遠山雪 喜蔭・武彦両撰」から20「兼題 立春 喜蔭・武彦」までを掲載し、稿末に【翻刻付記】として底本の誤脱等についての私見を記した。

17 遠山雪 喜蔭・武彦両撰

- 1 ひんがしの雲もみだれて遠方の雪の高ねに朝日さすなり 長行
左 遠山雪 喜蔭・武彦 両撰
右勝
- 2 浪路行く田豆の翅を見ゆる哉亀島山の松のしら雪 秀年
左
- 3 山高み月とはきを^マを雲間より雪に見せたる朝ぼらけ哉 兼利
右勝
- 4 遠方の松に降りしく白雪も間遠く見えてあかずも有るかな 千代蔭
左
- 5 曇りなき遠山雪の降りはへて松の一むらかぜさわぐ也 長行
右勝
- 6 詠むれば遠山松の木の間より雪の花ちる此の朝けかな 美かた
左
- 7 有明の月かげながら雲間なる高ねましろに積もる雪哉 兼利
- 8 花とちる雲とみだれて嵐山あらしの末にみゆきふる也 秀年
右勝
- 9 見わたせば遠の高ねや積もるらし雲の絶え間になびく白ゆき 同
左勝
- 10 山風もけさは絶えなん遠方の松の梢に降れるしら雪 千代蔭
左 雪中眺望
- 11 ゆふかけて降るかと思ゆる白雪は神にやめづる加茂の神山 兼利
右勝
- 12 あらし山松も紅葉も埋もれて雪より外は色なかりけり 秀年
左勝
- 13 見さくれば木々の梢は埋もれて朝日になびく峯の白雪 千代蔭
右
- 14 打ち渡す雲の梢は明けにけり雪の軒端にけぶり立つ見ゆ 長行
左
- 15 茎ばかり隈なす色はなかりけり筆捨山の雪の明けぼの 秀年
右勝

- 16 鏡山松につもれる白雪を我が庭面に移してや見む 千代蔭
左
- 17 朝日かげ匂ふ高ねに積もれるは薄くれないの雪かとぞ見る 秀年
右勝
- 18 雪さそふ比良の山風未見えて花のなみ寄る真のゝかや原 兼利
左
- 19 吹きおろす風もと絶えてあしの屋に入日たゞよふ雪の上かな 長行
右勝
- 20 武蔵野やふりさけ見れば雲の上に雪も果であるふじの芝山 兼利
左
- 21 朝風のはらへば庭の玉椿見る隙もなく雪は降りつゝ 美かた
右勝
- 22 漕ぐ舟も心してこそかよふらめ浪間に浮かぶ比良の白雪 兼利
左持 山家冬
- 23 しら雪に軒ばの山は埋もれて哀れとひ来る人だにもなし 千代蔭
右
- 24 月花をながめし庵も冬がれて積もるみ雪を侘ぶる頃かな 兼利
左勝
- 25 木のは吹く片山里の冬の夜はいとゞ淋しき峯の松かぜ 長行
右
- 26 打ちなびく煙やいづこ吹き絶えていとも淋しき冬の山ざと 千代蔭
左
- 27 山人のすめる岩ねの冬ごもりことしも雪はのがれざりけり 美かた
左
- 28 月も花もをにはおくるゝ山里の松にはとくもつもる雪かな 秀年
右勝
- 29 時雨せし名残をみせて山里は雪に淋しく降る木のは哉 兼利
右
- 30 冬はなを淋しき勝る山里のたゞ松風にとはれのみして 長行
左
- 31 住む人もあらしの山に散る雪の花にぞはるをおもひ社やれ 美かた
右勝
- 32 聞き馴れし落ちばの音もと絶えして谷水寒く氷るころかな 兼利
左持 水仙花
- 33 翁さび我がもとゆひと霜結ぶ垣根ゆゝしき花の色哉 兼利
右
- 34 霜むすぶ一もとゆひの垣根草翁さびたる花の色かな 重好
左
- 35 一本の花は匂へど雪深き垣ねに咲ける色としもなし 千代蔭
右勝
- 36 此の頃の垣ねは雪に埋もれてたゞ珍しき花を見るかな 長行
左勝
- 37 置く霜も猶色そへて咲く花の一本さむき庭の面かな 兼利
右
- 38 哀れにも枯れ行くのべのかきの本に一もと咲ける花も有りけり 千代蔭
左

- 39 冬枯れのすみれの床に咲く花は霜のゆかりに紐やとくらん
重好
- 40 雪積もるかきねに咲ける花ながら匂ふ色香は氷らざりけり
右勝 秀年
- 41 我がその竹の中道霜ちりてさむくもしらぬ花の色哉
左 長行
- 42 降りそめて消えにし雪を一村にとゞめがをなる花の色かな
右勝 兼利
- 43 色々に世に咲く花は多けれど雪の色なる草も有りけり
左持 美堅
- 44 大かたの草は枯れ行く朝霜にとけてしたしき花の色かな
右 重好
- 45 朝日さす青海原は果てもなしみどりの空に浪やかくらん
左勝海 兼利
- 46 わたつみの神やいづこにすみぬらんあなすがし沖つ白浪
右 秀年
- 47 和田つみのかぎりも遠く見えにけり浪のうねくくだると思へば
左 長行
- 48 風寒み沖の島山朝な夕けのけぶり打ちなびく也
右勝 千代蔭
- 49 和田つみの沖の汐せに風見えて夕ゐる田豆の鳴き渡る也
右勝 千代蔭
- 50 朝日さす浪はかげろひ海原の雲より末は夜ごもりにして
左持 兼利
- 51 神の世にかよひ給へし海原はくも見ゆる浪の音かな
右 長行
- 52 彼の見ゆる島山松の朝曇り船のかよひもおと斗りして
左 美堅
- 53 かぎりなき汐ぢは空も一つにて雲より見する沖つ嶋山
右勝 飛入
- 54 ほど遠き雲のかけはし風見えて入日も寒き浪の上かな
拔喜蔭 兼利
- 55 わた中の雲のかけはし風見えて入日もさむきなみの上かな
同
- 56 雪さそふ比良の山風末見えて花の浪よるしがおほわだ
同
- 57 あらし山松も紅葉もうづもれてゆきより外の色なかりけり
秀年
- 58 白雲もたちはなれたる遠方の雪の高ねに朝日さす也
長行
- 59 月花のなごりの色を雲間より雪に見せたる曙の山
兼利
- 60 聞きなれし松の落ちばも音絶えて谷水寒く氷るころかな
同
- 61 色々にほへる花もおほけれど雪に咲き出づる草はめづらし
美かた
- 62 おほかたの草は枯れ行く朝霜に咲きてしたしき花の色哉
重好
- 63 おく霜に猶色そへて咲く花の匂ひも寒き庭の面かな
兼利
- 64 降りそめて消えにし雪を一むらにとゞめがをなる花の色哉
同
- 65 あさ日さす青海原ははてもなし緑の空に浪やかへらむ
同

18 喜蔭・武彦 両評

喜蔭・武彦 両評
左 青

- 66 降りつもる高ねやいづこ曙の雲の絶え間になびく白雪 秀年
 67 朝日さすなみぢやいづこ海原の雲より末は夜ごもりにして 兼利
 抜 武彦
 68 ほど遠き雲の棧風見えて夕日かゞよふ浪の上かな 兼利
 69 かぎりなき汐ちは空も一つにて雲井に立てる沖つ嶋山 飛入
 70 雪積もる垣ねに咲ける花ながら匂ふ色香は氷らざりけり 秀年
 71 時雨にし余波(なほり)も見へて山里は雪に淋しく降る木のは哉 兼利
 72 見渡せば木々の梢は埋もれて朝日まばゆき峯の白雪 千代蔭
 73 武蔵野やふりさけ見れば雲の上に雪も果て有る不二のしば山 兼利
 74 漕ぐ舟も心してこげ花のごと浪間に浮かぶ比良のしら雪 同
 75 花とちり雲とみだれて嵐山あらしの末にみゆき降るなり 秀年
 76 遠方の高ねの松も白雪も間遠く見へて冬更けにけり 千代蔭
 77 茎ばかりふみ来しあともなかりけり筆すて山の雪の曙 秀年
 78 聞きなれし落ちばの音もと絶えて谷水寒く氷る頃かな 兼利
 79 降りそめてきえにし雪を一村にとゞめがほなる花の色かな 同
 80 逸 打ちなびく煙やいづこふきとふく冬の山里風すさまじき 千代蔭

- 1 大空の同じ翠に成りに鳧千町の早苗植ゑはてしより 秀年
 右勝
 2 植ゑはつる小田の若苗夏山の翠につゞく朝明涼しも 貞明
 左勝
 3 翠そふひら山松の色よりも近き浪辺は浪の音かな 美かた
 右
 4 翠なす庭の千草に置く露はおなじ色にぞ見へにける哉 幸雄
 左持
 5 若ばさす木々の梢も大空の翠に続く夏の山のは 兼利
 右
 6 水枝さす磯山松の影見れば打ちよる波も翠也けり 金原
 左
 7 小山田の早苗のみどり風見へて夕雨青く畦めぐりせり 長行
 右勝
 8 野中行く袖もみどりに見ゆるまで四方の若草茎立ちに鳧 信久
 左 黄
 9 大井川いせきの波も山吹の花色衣かけてほすらん 兼利
 右持
 10 山吹のちりて流れしなきさよきやや咲きそむる川骨の花 秀年
 左勝
 11 山吹の春は間遠しいでやとてませの鈴菜は咲き初めにけん 貞明
 右

- 12 雨そく庭の山吹咲きしより流れの色もかはりぬるかな 美かた
左勝
- 13 玉川の岸の山吹咲きしより置く露さへもおなじ色かな 千代蔭
右
- 14 夕日影かゞよふなみをよすがにて岸の山吹花咲きに覺 信久
左
- 15 かの見ゆるは山が末は明け初めていづこにきへし雲の影かも 長行
右勝
- 16 水無瀬川岸の山吹咲きしより流れも同じ色に見へ覺 一齋
左
- 17 菜の花の散るかと思えてあやなすは同じ色なる小蝶也けり 秀年
右勝
- 18 吉野川岸の山吹咲きぬらし流るゝ水の色に見えける 幸雄
左 赤
- 19 朝づく日かゞよふ波にさにぬらも御舟にきほふ御代の春哉 金原
右勝
- 20 咲き残る庭のつゝじの花の上にさかりあらそふ夕日かげ哉 美かた
左勝
- 21 紅のこぞめの梅は佐保姫の袖のしなひの色にや有るらん 兼利
右
- 22 天満山の赤みの岩の岩つゝじ神代ゆかしく朝日さす也 千代蔭
左勝
- 23 秋山のあそぶ乙女が裾かとも見へてゆかしき蔦の紅葉ゝ 貞明
右
- 24 朝日さす木の間に見ゆるさにぬりはもがきの神のいがき成るらん 金原
左
- 25 処女子が末つむ花の色深み紅にほふ夕日かげかな 長行
右勝
- 26 木の間つたふあさ日の面は山柿のかたみの色に夕日さす也 秀年
左勝
- 27 五月雨の晴れまを待ち得てあさなてる里の紅華咲きにけり 信久
右
- 28 朝日さす園生に咲ける紅の猶色深く見へにけるかな 幸雄
左勝
- 29 つかへけるその真心をみかき守衛士のたく火の色にこそしれ 長行更
右
- 30 鳥上の峯の夕日や照らすらんひのゝ川づらあかり引くなり 金原
左勝 白
- 31 降り積もる雪の山田の曙にさか羽みだれて鷺のとぶ見ゆ 長行
右

- 32 いづこより散り来し雪か月影に一むら積もる垣の卯の花 兼利
左
- 33 白雲の底にとよみて啼くきじの声の隙にも散るさくら哉 信久
右勝
- 34 消え残る木の間の雪と見ゆる哉白玉椿つらくにして 秀年
左勝
- 35 鳴く田づのつばさにつゞくはた雲の袖より白き今朝の雪哉 貞明
右
- 36 打ち寄する浪路の花の白鷺の翅もおなじ色に見ゆらん 一斎
左勝
- 37 白妙にほふ籬の菊の花猶色さゆる朝月夜かな 千代蔭
右
- 38 さやぎつる小笹も松も埋もれて風しづかなる雪の明けぼの 長行更
左
- 39 驚あさる磯辺は晴れて白浪の音も身にしむ初霰かな 美堅
右勝
- 40 広沢や岸の白菊咲きしより咲かぬ水際も同じ色哉 千代蔭
左 黒
- 41 雨につれてさわぐ羽音の山がらす何のさがにや闇に鳴くらん 長行
右勝
- 42 月落ちて烏鳴くなる山影のあかつきやみの空ぞあやなき 貞明
左
- 43 ほのくくと明けんを告ぐる鳥さへ木の下やみにまよひぬるかな 美かた
- 44 八重雲に月のかつらはかくろひて行^マゑもしらず烏鳴くなり 千代蔭
右勝
- 45 賤の家の煙棚引く山本に声もぐらき夕がらすかな 金原
左勝
- 46 雨雲の立ちのまがひに暮れ初めてねぐらをいそぐ村がらす哉 信久
左勝
- 47 烏羽玉の黒髪山のほととぎす闇にも声は隠れざりけり 兼利
右
- 48 黒崎に舟はてぬらし白浪のまだ立ち初めぬ暁にして 一斎
左勝
- 49 山川の黒木の橋に月落ちて淵瀬もわかず水鶏なく也 秀年
右
- 50 する墨に心の色も薄くこく世々経て残る水茎の跡 兼利
左
- 51 こらひ牛にむち打ちす^マへていそぐ哉黒木の橋は暮れがてにして 一斎
右勝
- 52 ゆふだちに楨の外山や曇るらん立ちむらがりて烏鳴く也 千代蔭
青
- 53 うすくこく落つる青ばに置く霜も色は一つに見^マへにける哉 幸雄
抜 喜蔭
- 54 つかへけるその真心をみかき守衛士のたく火の色にこそしれ

- 71 天満山の赤猪の岩の岩つゝじ神代ゆかしく朝日さす也 千代蔭
- 70 朝附日(あさつけ)かゝよふなみにさにぬりの舟も賑はふ御世の春かな 金原
- 69 紅の濃染の梅は棹姫(さざな)のころもの裾の色にや有るらん 兼利
- 68 逸 月落ちて鳥鳴くなる山風のあかつき闇ぞものはかなしき 貞明
- 67 山吹の散りて流れし水際より一もと匂ふ川骨のはな 同
- 66 山川の草木の橋に月落ちて淵瀬もわかせう舟さす也 秀年
- 65 漕(こ)き薄き人の心はする墨の色に残れる水茎のあと 兼利
- 64 あさもずとましら鳴くなる山柿のこの実あらはに夕日さす也 同
- 63 消え残る木の間の色は見ゆるかな白玉椿つばらかにして 同
- 62 大空の色と一つに也にけり千町の早苗植ゑはてしより 秀年
- 61 山川のきしの白菊咲きしよりみぎはの波も花にまされり 千代蔭
- 60 降り積もる雪の山田の明けぼのにさか羽みだれて鷺のとぶ見ゆ 長行
- 59 雨雲の立ちのまよひに暮れそめてねぐらをいそぐ村鳥哉 信久
- 58 うば玉の黒髪山のほとゝぎす闇にも声は隠れざりけり 兼利
- 57 山吹の花待つほどのなり(く)めにやませの鈴なは咲き初めにけん 貞明
- 56 賤が家のけぶりたなびく山守にこゑもを昏き夕鳥哉 金原
- 55 五月雨の雲間の夕日にはふまで里の紅花咲きにけり 信久
- 長行更

- 72 広沢や岸根のきくの咲きしよりさかぬ水際も白妙にして 同
- 73 黒崎に船はてぬらし白浪はまだ立ちそめぬ暁にして 一斎
- 74 咲きおくる匂ふ籬の白菊に色を染めたる朝月夜哉 千代蔭
- 75 朝日さす木の間にみゆるさにぬりはもがさの神のいがき成るらん 金原
- 76 月落ちて鳥鳴くなる山陰の暁やみの空ぞあやなき 貞明
- 77 処女子が末つむ花のかた色に紅匂ふ夕日かげ哉 長行
- 78 さやぎつる小笹も松も埋もれて積もる雪より夜は明けにけり 同更
- 79 大空の同じ緑に成りにけり千町の早苗植ゑ果てしより 秀年
- 80 消え残る木の間の雪とみゆる哉白玉椿つら／＼にして 同
- 81 賤が家の煙棚引く山本に声もをぐらき夕鳥かな 金原
- 82 する墨に心の色のくろきさへ世に経て残る水茎の跡 兼利
- 83 雨雲のたちのまよひにくれそめて寝ぐらをいそぐ村鳥哉 信久
- 84 白雲のそこにとよみて啼くきじの声のひまにもちるさくら哉 同
- 85 逸 何処より降りこしゆきか月かげに一むらつもる垣のうの花 兼利
- 19 題 朝落葉・炭竈・橋 喜蔭評
- 題 朝落葉 炭竈 橋 喜蔭評
- 左勝
- 1 小鳥啼く梢のあらし色見えて朝霜寒く散る木の葉かな 兼利
- 右
- 2 小雨降る山の下道行く子らがかさす袂にはゝそ散るなり 長行

- 3 夜のうちは雨と聞きしが今朝見れば庭に散り敷く紅葉也けり
左
右勝
千代蔭
- 4 我が庭につもる落ちばを今朝見れば夜の間の風の姿也けり
左
美かた
- 5 くちはてむ色とは見えじ霜さやぐ朝けの風に落紅は
右勝
秀年
- 6 霜はらふ羽風寒けきひ多鳥の鳴く音みだれて散る紅者哉
左
重好
- 7 此の朝明なびく風だもなき物を哀れ散り敷く庭の紅葉
右
千代蔭
- 8 朝風に外山の雲は吹きちりて紅葉落つ也秋篠の里
左勝
長行
- 9 朝霜のとくる梢に吹きわたる嵐も濡れて散る木の葉かな
右
兼利
- 10 冴えくつて明るく木末の霜おおもみ嵐もまたず散る紅葉哉
左
秀年
- 11 たつた山時雨に染めし紅葉ばも散りみだれつ此の朝け哉
右勝
長行
- 12 家鳩の埒を出でし羽風にやさ枝の紅葉散り流れけん
左
金原
- 13 朝まだき棚びく雲を吹き払ふ嵐に落つる峯の紅者
右勝
美かた
- 14 朝庭を払ふもかひな柞はの箒とる手にかつ散りにけり
左勝
重好
- 15 霜さやぐ朝けの風の音はして岩垣淵に木のは散る也
右
金原
- 16 家つ鳥埒放れてあさりする垣根にもろく散る木のは哉
左
炭竈
兼利
- 17 さらにだに淋しさまさる山里に炭焼く烟たぬ日ぞなき
右勝
千代蔭
- 18 踏みまよふ山路の末に炭竈の煙や雪のたづきなるらん
左
重好
- 19 降りつもる雪より立ち消えせぬは炭焼く浜の烟也けり
右勝
金原
- 20 白雪のかゝる深山の遠方や誰炭竈の烟なるらむ
左勝
重好
- 21 霰降る一村雲に立ちそひて嵐もけぶる峯の炭がま
右
兼利
- 22 朝日かげ曇るとみしは雪ならで煙立つ也峯の炭がま
左勝
長行
- 23 炭がまのあたりやいづこ立ち登る煙も雪に降り埋むらし
右
秀年

- 24 炭がまの煙やいづこ深山辺の雪の木末に頭れにけり 千代蔭
左
- 25 降る雪に罅の松は埋もれて炭竈近く鳥鳴くなり 美かた
右勝
- 26 み雪降る松のしげみに炭竈の煙をめぐる夕鳥かな 長行
左
- 27 時雨もる笠とり山の炭がまの煙おもげに打ちなびく也 兼利
右勝
- 28 冬ながら霞む山辺や炭がまのあたりぬるみし煙なるらん 秀年
左
- 29 朝ぼらけ炭竈遠く吹く風に煙みだれて小野々山中 美かた
右勝
- 30 時雨行くかなたの山は晴れながら煙に暮るゝ小のゝ炭竈 長行
左
- 31 風寒み雪げの雲にさそはれて烟打ちなびく峯の炭がま 兼利
右勝
- 32 山風に雪げの雲は吹き絶えて炭焼く烟打ちなびくなり 金原
橋
左勝
- 33 東路のさのゝ舟橋さらでだに浮き沈みなる世を渡る哉 重好
右
- 34 我がせこをたづさへ来なば周防なる錦の帯の橋を見せばや 金原
左
- 35 谷水のすむと計(ほかり)の丸木橋誰が世にかよふしをりなるらん 兼利
右勝
- 36 嵐吹く谷の柴橋今は世に通ふ夢路もかれぐにして 重好
左勝
- 37 あやふさはかへり見てこそまさりけれ雲立ち渡る木曾の棧 秀年
右
- 38 雨晴るる雲の絶え間にかつ見えて夕日ぞ渡る峯の棧 長行
左持
- 39 仙人のまどひし峯やたづねてん名のみに残る久米の岩橋 千代蔭
右
- 40 衣あらふ妹が裳裾ぞゆかしけれ名ママのみに残る久米の橋本 秀年
左
- 41 をとめ子が朧月夜の板橋に霜にぞ跡を残してや行く 美かた
右勝
- 42 さゝがにのくもであやうき八橋をつらくも渡る我が夢路かな 兼利
左
- 43 宇治川の橋にしなくは武士(ものゝ)のあらそひ果てし跡を見ましや 千代蔭
右勝
- 44 山川の深き笹辺の丸木橋つゆ吹き渡る風も有りけり 美かた
左持
- 45 落ち滝(た)つ谷の棧霧こめて音こそひゞけ岩もとどろに 長行
右
- 46 白雲の遠方野辺に月落ちて川音高し前の棚ばし 金原

- 62 落ち・滝(たき) つ谷の棧霧こめて音こそひゞけ岩もとゞるに 長行
- 61 逸 あやふさはかへり見てこそしられけり雲立ち渡る木曾の棧 秀年
- 60 あられふる一村雲に立ちそひて嵐も烟る峯の炭がま 兼利
- 59 東路のさのゝ舟橋浮き沈みわたりあやふき世にこそ有りけり 重好
- 58 朝霜の雫ひまなき梢より嵐のぬれて散る木の葉かな 兼利
- 57 朝廷を払ふもかひな玉はゝきとらんとすれば紅者散る也 重好
- 56 霜さやぐ朝けの風の音はして岩垣淵に木のは散る也 金原
- 55 嵐吹く谷の柴橋しばし世にかよふ夢さへすべなかり覺 重好
- 54 炭がまのあたりやいづこ立ち登る烟は峯の余所にこそ見れ 秀年
- 53 小鳥啼く梢の嵐音さへて朝霜寒く散る紅者かな 兼利
- 52 朝ぼらけ庭の梢の霜おおもみ嵐もまたず散る紅者哉 秀年
- 51 家鳩の埒を出づる羽風よりさ枝の紅者散りそめにけり 金原
- 50 雲かゝる松よりおおくになびく也誰炭竈の烟なるらん 重好
- 49 山風に雪げの雲はかつ晴れて炭焼く烟峯つたふ見ゆ 金原
- 48 小雨降る山のした道行く子らがかざす袂にはゝそ散る也 同
- 47 朝日かげ曇ると見しは雪ならで煙立つ也峯の炭がま 長行
- 63 朝風に外山の風は跡もなく紅者のみちる秋篠の里 同
- 62 兼題 立春 喜蔭・武彦
- 78 逸 あられふるひと村雲に立ち添ひて嵐も烟る峯の炭がま 兼利
- 77 朝霜のそへる梢を吹きわたる嵐もぬれて散る木のは哉 兼利
- 76 降り雪も松や埋るゝ炭竈の煙をめぐる夕鳥哉 長行
- 75 さえくゝて明るる木末の霜やおもき嵐もまたで散る木のは哉 秀年
- 74 我が庭につもる落ちばをけさ見れば夜の間の風の錦也けり 美かた
- 73 小鳥啼く朝明の風の色見えで置く霜ながら散る木のは哉 兼利
- 72 朝日かげ曇ると見しは雪ならで炭焼く峯の烟なりけり 長行
- 71 危ふさはかへり見て社まさりけれ雲立ち渡る木曾の棧 秀年
- 70 笹がにの蜘蛛手あやふき八橋を渡ると見しは夢路也けり 兼利
- 69 東路のさのゝ舟橋浮き沈み思ひもかけぬ世を渡るかな 重好
- 68 仙人のまどひしきしや尋ねてん名のみに残る久米の岩はし 千代蔭
- 67 雨晴るゝ雲の絶え間にかつ見えてゆふ日ぞ渡る峯のかけ橋 同
- 66 時雨行くかなたの山は晴れながら煙に暮るゝ小のゝ炭がま 長行
- 65 家鳩の埒を出でし羽風にや庭の紅葉ゝ散りそめにけむ 金原
- 64 白雲のかゝる深山の遠方や誰炭竈の煙立つらん 重好
- 63 朝風にかゝる深山の遠方や誰炭竈の煙立つらん 重好

兼題 立春 喜蔭・武彦

左

1 埋火にうづむ心も花鳥のおもひ立ちそふ春は来にけり 兼利

右勝

2 うら／＼と烟る野川の薄氷に月かげまばゆく春や立つらん 千代蔭

左持

3 ものごとに神をゆかしくおぼゆるは春立つけふの心也けり 秀年

右

4 さざ浪にむかしの春やよせくらし霞によどむ志賀の大輪浦 重好

左

5 春きぬとにほふ霞の山眉に朝けの烟立ちそひにけり 長行

右勝

6 新玉の年や立つらん山の端の松に霞のなびき初めけり 千世蔭

左

7 朝日さすきたよりかけて我が門の松こそ霞め春や立つらん 美堅

右勝

8 春の立つ朝けの空や鶯も尾羽打ちふりて啼きすむなり 秀年

左

9 唐土(もろこし)の虎ふす野辺もけふよりは霞み渡りて春や立つらむ 同

右勝

10 赤星の光に去年やこもるらむ春と別るゝ峯の横雲 兼利

左

11 谷水のとゞむ岩せに浪の花咲くや春立つ始めならまし 飛入

右勝

12 君が世の明るあしたの田豆が音に千とせの春のしるくも有る哉 長行

左

13 大神の高根の朝日霞む也雪かき分けて春や立つらん 秀年

右勝

14 花と見し梢の雪は消えも果てて霞み初めたる朝日かげかな 飛入

左

15 香ぐはしく春や立つらん我が門の梅に柳に霞棚引く 千世蔭

右勝

16 大神の高ねの雪の花曇りこれや春立つ霞なるらむ 秀年

水鶏

左

17 独り寝の夢を水鶏に叩かれてまだ宵ながら明けぬ夜ぞなき 千世蔭

右勝

18 水草生ふ桂の七瀬月更けてそこはかとなく啼く水鶏哉 重好

左

19 終夜(よすがら)叩く(ママ)みな(ママ)の声す也柴のかりやと哀れしらずも 幸雄

右勝

20 水鶏なく夜をなつかしみ月影に我が隠れ家も戸ざしかねつゝ

左

21 明るるとて叩く水鶏かあやなくも幾たび夢をはかる夜半かな 兼利

左

22 うきぬなのうきてたゞよふ水さび江に何をよすがに水鶏鳴く也

右勝

- 23 池の辺に鳴くや水鶏もいつしかと遠ざかり行く寝やの枕に
左 秀年
右勝 美堅
- 24 夕立の名残涼しき沢水に月影見えて水鶏啼く也
左勝 信久
- 25 小雨ふる野沢の岸の夕まぐれ水草隠れに水鶏なく也
右 長行
- 26 子規鳴くとして誰やさそふらん月の門田に叩くくひなは
左勝 兼利
- 27 夏の夜はやがてもあけん夢の間を寝られぬまでに鳴く水鶏哉
右 信久
- 28 ひとこと哀れくひなの叩く也さながらとまる心ともなく
擣衣 幸雄
左持
- 29 紅葉の片山影は霧こめて誰が里なれや衣打つこゑ
右 長行
- 30 浅茅生や秋風寒く吹く萩の音もとゞろに打つ衣かな
左 兼利
- 31 旅人をまつちの山の秋風に乱れて誰か衣打つらむ
右勝 飛入
- 32 聞きなれて聞かぬも淋し長月の長き夜比の衣打つこゑ
左勝 信久
- 33 風の音もまだ告げやらぬ松の戸に秋おどろかし衣うつ也
右 重好
- 34 風寒み庭の小ざゝに月更けて音もさやけき小夜砧かな
左 千世蔭
- 35 木がらしをいとはで世には住みながら砧の音に心たゆたふ
右勝 美かた
- 36 さやかなる月は外山にかくろひて衣うつ也秋篠のゝ里
左持 千世蔭
- 37 まげ庵の軒もる月に音さえて打つも寒けし麻の小衣
右 重好
- 38 咲く萩の花ずり衣秋のゝに誰集ひてか打ちかはすらし
左持 兼利
- 39 小夜更けて袖しぼれとや闌近く月打ちそふから衣かな
右 長行
- 40 風寒み夜や更けぬらんから衣打つ音ふるき秋篠のゝ里
左持 千世蔭
- 41 打ちしきる賤がさゝやの小夜砧哀れ更け行く音聞こゆなり
右 千世蔭
- 42 寝覚めつゝ打ちすさむらんから衣絶えど更くる音もあわれに
左 幸雄

- 43 ねざめして物おもひおれば山窓にかしのみまじり霰ふる也 秀年
右勝
- 44 彼の見ゆる村山松の朝曇り嵐いとはで降るあられかな 美堅
左
- 45 稍吹く嵐もさえて池の面の月かげくたく玉あられ哉 長行
右勝
- 46 さそひこし嵐やいづこ玉霰庭の苔路に音たゆむ也 重好
左勝
- 47 ひらぎの花のさかりの木ぬれより溢れて薫る玉霰哉 千世蔭
右
- 48 つれてこし雁も乱れて雲より霰の玉や翅打つらし 兼利
左持
- 49 呉竹に積もりもあへずさら／＼とくだけで落つる玉あられ哉 幸雄
右
- 50 夜たゞ吹く風のみならで降る音の身にしむ物は霰也けり 長行
左
- 51 山里の紅者時雨の後とへば霰玉しく庭とこたへん 重好
右勝
- 52 さながらにつもるともなく山川に風流れして霰降る也 千世蔭
左勝
- 53 夕月のかげはをぐらき軒ばより音さやかにも降る霰哉 秀年
右
- 54 今更に玉の緒とけて卷向の山もどろに降るあられ哉 兼利
左
- 55 椎の葉に積もりもあへず草枕旅の伏家に霰たばしる 幸雄
右勝
- 56 霰ふる外山の檜原暮れそめて雲に声有る村がらす哉 兼利
左勝
- 57 さばかりにたまりもあへず庭の面の小笹におもる玉あられ哉 秀年
右
- 58 軒の端にふる程もなくさら／＼と風にまじりて霰たばしる 千世蔭
右
- 59 むら雨の雲吹きはらふ朝東風の鴉がね高し山崎の里 飛入
右勝
- 60 山のはの鴉の声のみもれにけり八重立つ霧は夜ごもりにして 兼利
左
- 61 紅葉ちる垣内の谷の朝曇り散りかふ鴉の声ぞ隙なき 重好
右勝
- 62 朝妻の片山ぎしに霧こめてうらさぶしくも鴉が音聞こゆ 秀年
左
- 63 湊江の尾花が末による浪は鴉の羽ぶきの風にや有るらん 幸雄
右勝
- 64 をしねほす山畑紅葉鳴きて嵐の隙もかつこぼれつゝ 長行
左勝
- 65 我がやどに吹くや嵐の朝まだき鳴きつる鴉の声ぞ身にしむ 美堅
右

- 66 いつしかも鴉や来にけむ鳴きささぶ木の間のすゞめうずすまりけり
秀年
- 67 いたづらになびく尾花の野司に秋をさかりと鴉や鳴くらむ
左
千世蔭
- 68 小山田の稲木霜ちる明けがたの嵐にきほふ鴉の一声
右勝
重好
- 69 櫛の実の独り家をれば朝な／＼鴉の尾ふりもをかしかりけり
左
秀年
- 70 夕間暮野中の松に声す也鴉も鶉の床やとふらん
右勝
兼利
- 71 山陰はまだ夜ごもりに鴉の鳴く岡辺のくぬ木朝日さす也
左
長行
- 72 くだつ日の心短く成りしより鴉がねきかぬ夕暮もなし
左
飛入
- 73 古里の尾花がすゑに鴉鳴けばむらゐる声もつれなかりけり
右勝
千世蔭
- 74 木枯の吹くにきほひてさつ人の弓月がたけに鴉が音聞こゆ
左勝
秀年
- 75 散り残るくぬ木の霜と風見えて鴉がね寒し秋更けぬらん
右
千世蔭
- 76 淋しさを心とすめる庭もせの尾花が末に鴉来鳴くなり
抜 よしかげ
幸雄
- 77 散り残るくぬ木の霜に風さえて鴉が音寒し秋更くるらん
千世蔭
- 78 梢ふく風にたぐひて池の面の月影くたく玉あられかな
長行
- 79 うきぬなは浮きてたゞよふみさびえにところさだめで水鶏なく也
秀年
- 80 小雨ふる野河のきしの夕まぐれ水草隠れに水鶏なく也
長行
- 81 山かげやもずの声のみ明けにけり霧のまがきは夜ごもりにして
兼利
- 82 明けぬるかうす霧がくれ鴉鳴きて岡べのくぬ木朝日さす也
長行
- 83 秋はぎの花ずりごろもさをしかの妻どふ声に打ちかわすらし
兼利
- 84 ゆふ月の影はをぐらき軒ばより音さやかに降るあられ哉
秀年
- 85 大神の高ねの朝日霞む也雪かき分けて春や来ぬらん
同
- 86 かの見ゆる村山松の朝雲に嵐きほひて降る霰かな
美かた
- 87 さそひこしあらしやいづこ玉霰庭の苔路に音たゆむ也
重好
- 88 浮雲にみだるゝ雁の声す也霰の玉やつばさ打つらし
兼利
- 89 うら／＼とけぶる野河の薄氷に月かげまばゆし春や立つらん
千世蔭
- 90 あかぼしの去年のなごりも消えはてゝ春に別るゝ峯の横雲
兼利
- 91 夕立の名残涼しき沢水に月影見えて水鶏なく也
信久
- 92 きゝなれて聞かぬも淋し長月の長き夜頃の衣うつこゑ
同
- 93 独りねのゆめを水鶏に叩かれてまだ宵ながら明けぬ夜ぞなき
千世蔭
- 94 風の音は時としもなき松の戸に秋おどろかし衣打つなり
重好
- 95 柀の花のさかりのこぬれよりこぼれて薫る玉あられかな
千世蔭
- 96 さばかりはたまりもあへず庭の面の小ざゝにさわぐ玉霰哉
秀年

97 逸 あげぼのゝ雲井をかける鶴がねにちとせの春もひゞきそめつゝ
長行

抜 武彦

98 いたづらになびく尾花の司すいに秋の盛りと賜や鳴くらん
千世蔭

99 さやかなる月は外山にかくろひて衣擣つ也秋篠のさと
同

100 曲庵の軒もる月におとさえて打つも寒けし麻のさ衣
重好

101 紅葉ちる片山陰は霧こめて誰が里なれや衣打つこゑ
長行

102 さながらにつもる共なく山風に風流れして霰降るなり
千世蔭

103 漣(なみ)にむかしの春もなつかしく霞ぞよどむ志賀の大わだ
重好

104 さばかりはたまりもあへず庭の面の小笹におもる玉霰哉
秀年

105 物ごとに神代ゆかしく覚ゆるは春立つ今朝の心なりけり
同

106 埋火に埋む心も花鳥の色音にそはん春は来にけり
兼利

107 小山田や霜の花ちる明けがたの風にきほふ鳴の一声
重好

108 檜の実の独り家をれば朝な／＼鳴の尾ふりも面白きかな
秀年

109 夕月の影はをぐらき軒ばより音さやかにも降る霰哉
同

110 夏の夜はやがてもあけん夢の間を寝られぬ迄に鳴く水鶏哉
信久

111 露おもる庭の小笹に月更けて音もさやけき小夜砧かな
千世蔭

112 誘ひこし嵐やいづこ玉霰庭の苔路に音たゆむ也
重好

113 梢吹く嵐もさえて池の面の月影くたく玉あられかな
長行

114 逸 ゆふ立の余波涼しき沢水に月影見えて水鶏啼くなり
信久

3 歌 二句「月とはきとを」―「月とはなとを」の誤りか。

41 歌 四句「さむくもしらぬ」―「さむさ(き)もしらぬ」か。

51 歌 四句「■くも見ゆる」―「遠くも見ゆる」か。

18 喜蔭・武彦 両評

10 歌 三句「なぎさよき」―「なぎさより」の誤りか。

19 歌 三句「さにぬらも」―「さにぬりも」の誤りか。

24 歌 四句「もがきの神の」―「もがさの神の」の誤りか。

30 歌 五句「あかり引くなり」―「あから引くなり」の誤りか。

57 歌 三句「なりめにや」―「ながめにや」の誤りか。

65 歌 初句「漕き薄き」―「濃き薄き」の誤りか。

66 歌 二句「草木の橋に」―「黒木の橋に」の誤りか。

69 歌 三句「棹姫の」―「佐保姫の」か。

19 題 朝落葉・炭竈・橋 喜蔭評

5 歌 五句「落紅は」―「落つる紅葉」か。

7・8 歌の番いに勝負付なし。

20 兼題 立春 喜蔭・武彦

3 歌 二句「神をゆかしく」―「神世ゆかしく」の誤りか。

39 歌 四句「月打ちそふ」―「月打ちそふる」の「る」脱か。

73 歌 四句「むらゐる声も」―「むれゐる声も」か。

98 歌 三句「司に」―「野司に」の「野」脱か。

110 初句「夏の夜は」―「の」の上に重ね書きして「は」とあり。

17 遠山雪 喜蔭・武彦 両撰

【翻刻付記】

原稿受理 令和二年一月十日